

Vol.1

気がつけば 函館市民に なつていた。

『よそ者から見た町の魅力』

はじめに自己紹介を兼ねて

京都から函館に来て四年余りが経ちました。最初は旅行でしたから、腰を落とす一年ほどです。まだ市民になりきつていよいよそ者の目で、函館について感じたことを綴つておきたいと思います。

京都で最後に暮らしたのは西陣で、京都で暮らしている弁天と雰囲気が似ています。名前の通り西陣織で栄えた町でしたが、今は織元もほとんどなくなり、たまに機織りの音が聞こえてくると、「まだやつているところがあったのか」と驚くほどです。若い人の姿は少なく、古い家屋が目立ちます。

ただ京都全体を見れば、近年、観光は絶好調です。リーマン・ショックと東日本大震災の影響は免れませんでしたが、阪神大震災後の平成八年以降、観光客数は右肩上がりで増え続けていました。

会場跡は岡崎公園として今に引

函館と京都、維新の明暗

歴史的に見れば、千年の都・京都にとつて最大の危機は明治維新でした。都の地位が東京に奪われたのですから、町は意氣消沈し、さらに追い打ちをかけるように、有力商人は東京へ流失しました。同時に函館が開港場として飛躍したのとは見事に逆です。

危機感を胸に、市民がお金を出し合って学制公布より前に小学校をつくります。行政も今で言う理化学講習所や産業振興センター、染織試験場、農業試験場を設け、琵琶湖から疏水（運河）を引いて発電や水運に利用するなど、新時代への基盤づくりに邁進しました。

町おこしイベントの成功と失敗

明治二十八年には、平安遷都から数えて千百年を記念して、「建都千年祭」が開催されます。いわば町おこしイベントです。

煙や荒地だった岡崎地区を会場とし、そこに平安神宮が創建されました。社殿は平安京の大極殿と應天門を復元したものです。平安京以来の各時代の装束で練り歩く時代行列が行われました。

百二十年も前の企画力、実行力には驚きますが、百年後の平成六年に行われた「建都一千周年」記念事業はこれといった目玉もなく、鳴かず飛ばずに終わりました。後に残る建物や行事もありません。

当時の京都は観光客も年々落ち込んでいましたが、市民一丸の危機感もなく、前例を真似ただけで、運営は広告代理店にほぼ丸投げでした。確かに広告代理店にはノウハウも情報もありますが、町おこしには、それよりも「わが事」として湧き出るパワーが必要だったのではないかと感じます。

町の魅力は「つく」のではなく「できる」もの

私が函館に惹かれた理由の一つは、映画祭やバル街、野外劇など、よそでは考えつかないようなイベントがあることでした。どれもが、自分たちが自分たちで楽しむために、独自の発想で始めたものだと私は理解しています。最初から観光客の呼び込みを目的としたものだつたら、たぶん興味はわかなかつたでしょう。

建都千周年祭も有能な役人や政治家がバックアップしていますが、平安神宮にしても時代行列にしても、千年の都・京都ならではの特色を生かしたものであり、市民のプライドとも合致していました。

町はつくるものかもしませんが、町の魅力はつくるうとしてつくれるものではありません。町への愛着と、日々の町づくりの積み重ねを通して、自然にできあがつてくるものではないでしょうか。



市民創作 函館野外劇

★プロフィール★

おおにし つよし 剛さん

大阪出身。

2011年秋より、函館に移住。

「新函館ライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。

2012年には、2008年秋からの函館通いで感じた町の魅力を綴った「新函館写真紀行」を出版。

現在は、移住サポーターとしても活躍している。

